

大島塾新聞

ムロノキ
新聞社

号外

広告



号外



四月に入って今回の五島釣行にむけての自主トレのつもりで何度か、ひとりでフカセ釣りの練習に行っていました。やはり釣りはいい。体を動かして適度に疲れるとぐっすり眠れるし、なにより楽しい。最近ほとんどしなくなっていた大島の釣り、みんなも一緒に行かない? いいことがあるよ。号外、号外!

時は令和の時代が明けて間もない五月三日、所は大島神浦。こここの堤防は干潮だと全く釣りにならない場所で、そのため干潮の時間に行けば誰もいないからよい場所を確保できる。この日もそうだった。釣り座を堤防の先

端に確保し撒き餌の準備をして、その後は読書をしながら潮が上がるまでの時間をつぶした。

夕方五時に釣りを開始、この時はまだ海面が低くタモが届かない時間だったので「まだ大物は来ないでね」とタマヅメを待ちつつエサ取りの小魚と戯れていた。六時を過ぎたころウキ下四分の沖アミをそいつがいきなり喰ってきた。グングンと首を振り沖に向かって走る重い引きに「五十センチオーバーのチヌ」を確信した。だがまだ到底タモが届く潮位ではない。取り込みはもう少ししようかと思つたが「とりあえず浮かせてからね」と自分に言い聞かせた。ところがそいつは三分経つても五分経つても全く浮いてこない。弱る気配がない。ウキさえ見えてこない。「チヌじゃない、かなりのサイズの鯛か?」。チヌ狙いの仕掛けなのでハリスは一号、チヌ針二号、一切無理はできない。鯛なら根に潜り込むことはないので「いくら時間をかけてもラインの出し入れで(釣り上げるのは無理としても)、せめて姿だけは見たい」。

この魚を手にとってきたには二つの幸運によるところが大きい。針掛かりから約十分後、折からの南風にあおられて大きな藻の塊が二つ筆者のラインめがけて流れってきた。これにかかると細ハリ

スのラインブレークは必至である。この時なんという幸運、急に風向きが変わり東風が吹いた。「えっ、神風?」。うまい具合に藻は沖に流れ去り取り込み場所が開けた。さてそれからさらに数分後、水中にゆらりと白い魚影が見えた。案の定真鯛である。そうなるに欲が出て何とかして取り込みたくなるのが人情。一段低い場所があるのだが飛び降りたらたぶんケガする高さ(若けりや飛んでいましたかね)。いったん魚を沖に走らせて思案をあれこれ巡らすか、やはり方策なし。仕方なしにタモを伸ばしてみると、このもたついている間になんとまた幸運にも潮が上がってタモ枠の半分が水面にとどいた。そして相当な時間の格闘でやつにはもう尾を振る力さえ残っていなかった。「もうどうにでもして」ってな感じでピクリともせずタモに収まったのは、のちに通津のかめやで計測すると六十三センチ、二キロ八百の雄の真鯛だった。持参したクーラーは小さく氷も入れていなかったのに、

大量に残っていた撒き餌を破棄してさっさと帰途についた。

長い手柄話にお付き合いいただきありがとうございました。聞くところによると大島の地磯や波止でぼつぼつと真鯛が上がっているらしい。フカセで釣れたのはまあ宝くじみたいなものかもしれないけれど、コウジつけて投げ釣りとか、五島と同じカゴ釣りで狙ったらそこそこ確率で釣れるんじゃないか? 土曜の夕方から出かけてタマヅメからの夜釣り、ワクワクしない? 昔みたいにまたみんなで大島に行ってみませんか。

